

谷川俊太郎の詩集「愛について」(一九五五・一〇、東京創元社)には、「John Cage」の献辞を付した「音たち」と題する詩が収められている。

音たちが

河になりたいと思わずに流れてゆくが
いつのまにか音たちはいなくなり
そこには河が流れている

「……」

だが音たちが自分何になるかを忘れて
隣通と馬鹿を一緒に疲れたように

自分をすっかりむき出しに流れてゆくと
音たちはいつか河になつて

そして音たちは自分が河なのにもう気づきもしない
「……」

音たちは自分を見ずに
自分を生かしているものの中に

「……」

音たちは世界の中にまぎれこむ
月のめぐりのようにいつまでも歌っていて
月のめぐりのように気づかせず人の中

「……」
そのようにして音たちは帰ってゆく

(音たち)

ジョン・ケージ(一九一二年—一九九二年)は、アメリカの作曲家で、現代音楽の旗手の一人である。十二音技法のアルノルト・シェーンベルクに学んだが、その後実験音楽に傾倒し、一九三〇年代の終わりには、打楽器と弦に異物を挟んだプリペアド・ピアノを用いた作品を書いた。五〇年代に

入ると、「易の音楽」(一九五二)や、楽譜に休止のみが記された「4分33秒」(一九五二)に代表される偶然性の音楽を推進し、五線譜ではなく図形楽譜をも駆使した。「易经」に啓示を受け、コイン投げや骰子などによるチャンス・オペレーションを用い、また鈴木大拙の禅の哲学などに影響を受けたことでも知られる。「4分33秒」は沈黙の曲と言われるが、実際に演奏されると完璧な無音にはならない。人間が現場で演奏する限り、そこには必ず環境音や身体の音が入り込む。ケージは、「変化」(一九五八)と題する講演録で、「かつては、沈黙とは音の隙間のことであり、さまざまに目的に役立つものであった。「……」こうした目的や他の目標が何もないところでは、沈黙は別のもの——沈黙でなく、音、環境音——となる。その性質は予期することができず、つねに変化している」と述べている。このくだりに触れて白石美雪は、「我」もしくは「主体」として、自ら音を発しなくとも世界に音は鳴り続けているのであり、これからもそうであるとすれば、作曲家が休符で示している沈黙とは、作曲家が意図した音以外の、多様なノイズが響く時間となる」と解説する。予期できず、常に変化の過程にある音は、楽音に対する雑音であり、必然に対する偶然である。作品「4分33秒」の意味・意義は多様に解釈できるが、様式において、それまでは雑音・偶然・例外状態とされた要素を導入または再導入することが、音楽のみならず、芸術における現代、あるいは現代芸術の歩みであったことは疑いもない。

「いつのまにか音たちはいなくなり／そこには河が流れている」とうたう谷川の「音たち」は、あたかもケージによる実験音楽の試みを暗示するかのようだ。「自分が何でもかまわない」「ただ自らを投げ出している」「自分を生かしているものの中にいる」とは、「音たち」が「河」「雲」「樹」そして「世界」と渾然融合し、つまり楽音も雑音もない状態として、境界を取り払われた境地が語られている。「そのようにして音たちは帰ってゆく」とは、どこへ帰ってゆくのだろうか。それは、音とその根源であり故郷である世界と一体化することなのだろうか。その時、差異化され様式化された和声や旋律のような音として、もはや何かが鳴っているというのではないだろうか。従ってこの時には、沈黙が、ある種の理想状態であるような境涯がうたわれているのである。ケージの音楽(あるいは「4分33秒」)に、そのような理想状態が認められているのだろうか。ちなみに谷川は、日本の現代音楽家、武満徹と親交を結び、武満に捧げられた詩やエッセイも数多くある。

沈黙が、谷川の詩において最も重要な課題であったことは、はやく三浦雅士によって指摘されている。三浦は、「谷川俊太郎にとっては、書くことではなく沈黙することこそが世界に調和することである」と述べた。沈黙の観念に焦点を絞り、それと言語との関わりから谷川の詩的道程を丹念に検証したのが四元康祐である。四元は、「哲学者であるウイットゲンシュタインが「語る」ことのできないものことについては、ひとは沈黙しなくてはならない」「(論者)と述べて深く口を開きすのに対して、詩人である谷川は「ひたすら小さなものについても／語り尽くすことはできない／沈黙の自身は／すべて音楽」(「Answers」4)という正反対の立場をとる」と論じている。まさに四元の言うように、谷川は沈黙について、むしろ饒舌に語った詩人にほかならない。

人は正しく歌えない
無を語る言葉はなく
すべてを語る言葉もない

〔14 野にて〕〔六十二のソネット〕

うたうため うたうため
私はいつも黙っていたい
私は詩人でなくなりたい
私は世界に餓えているから

〔牧歌〕〔愛について〕

沈黙という言葉で

沈黙をはるかに指し示すことはできる

だが沈黙という言葉がある限り

ほんとうの沈黙はここにはない

〔断片〕〔シャガールと木の葉〕

限りなく沈黙に近いことばで
愛するものに近づきたいと
多くのあえかな詩が書かれ

〔裸身〕〔ミニモ〕

言葉が

出来ないことを

音楽は

〔問いがそのまま〕〔虚空へ〕

詩人が詩を書く際に、唯一最大の技術をもたらすはずの言葉は無力であり、決して世界をとらえることができない。だが「私は詩人でなくなりたい」(牧歌)と嘆くこの「私」は、しかしそのことを時によって語るほかにない。初期のエッセー「沈黙のまわり」には明確に、「言葉をもって沈黙を語るうとするに、どんな意味があるのか。それにはむしろ意味はない」という前提にもかかわらず、「生きるために、詩人は言葉をもって沈黙と戦わなければならない。それが詩人の義務である」とする態度表明が見られる。世界の本質である沈黙を言葉は語ることでできず、言葉は世界をつかむことができない。これは、言語による世界把握の不可能性という信念である。その結果として、谷川の多くの詩の基調には、発語の一形態にほかならない時の中心テーマがほかならぬ沈黙であるというパラドックスが生じ、また、そのパラドックスを抱えつつ書く態度に対するアイロニーが生じた。またそこから、「そして私はいつかどこから来て／不意にこの芝生の上に立っていた」(芝生)「夜中に台所ではくはきみに話しかけたかった」とする偶然的到来者としての自己認識、ま

たは被投性の意識と、他者との交流の難しさについての感覚なども生まれてくる。右に年代順に挙げた詩の出版のうち、最も初期のものは一九五三年の「六十二のソネット」であり、最も新しい「虚空」は二〇二一年の詩集である。七〇年もの間継続して、沈黙の観念に対する谷川詩の傾倒は変わらぬ。

このような沈黙にまつわるパラドックスとアイロニーにより、谷川の詩は、時の語っている内容が時そのものの理念であるような、時とは何か、時には何ができるかに関する、時についての詩、いわばメタポエトリとしての性質を帯びることになる。しかし「沈黙という言葉がある限り／ほんとうの沈黙はここにはない」(断片)とすれば、この問いかけは永久に解決されない。谷川のテクニクは、必然的に発語の瞬間を尋ね続ける根源性・原初性・永遠性を身にまとい、また必然的に一つの形式・様式から次の形式・様式への変化を求めてやまない。沈黙を起点として、谷川の詩的営為は幅広いヴァリエーションを獲得してゆくが、その変移の渦中においても、谷川は断片に「沈黙へと立ち返っている。」「言葉が／出来ないことを／音楽は／する」(「問いがそのまま」)という場合の「音楽」とは、このように持続するパラドックスのあり方に照らせば、ケージの実験音楽などを覆う言葉としてとらえられるだろうか。何しろそこでは、楽音と雑音、音と環境とは距離を失うわけであるから。谷川俊太郎が詩集「二十億光年の孤独」(東京創元社)を発行して詩人として出発したのは、ケージの「4分33秒」が発表されたと同じ、一九五二年のことであった。

- 1 白石英富「ジョン・ケージ 混沌ではなくアナーキー」(二〇〇九・一〇、武蔵野美術大学出版局) 参照。
- 2 ジョン・ケージ「変化」(サイレンス)一九六二、柿沼敏江訳、一九九六・四、水声社、四八―四九ページ。
- 3 白石英富「ジョン・ケージ」(前掲)、二二五―二二七ページ。
- 4 武満徹もまた、谷川についてのエッセーを幾つか書き、谷川と対談もしている。また武満はケージとも交流がある。本章との関係では、「消える音」を聴く(『毎日新聞』一九九二・七・一〇夕刊)において、発せられた音は必ず消えるということに立ち戻って聴くことを提唱する。そして、「音は消えるのだ」ということを、本質的な問題として捉え直した作曲家は、ジョン・ケージだろう。だが、すべての音楽表現の根底には(消えていく)音を聞き出すこと、人間の、避けがたい、強い欲求が潜んでいるはずだと述べている。引用は武満徹「遠い呼び声の彼方へ」(一九九二・一一、新潮社)による(三三―三六ページ)。
- 5 三浦雅士「谷川俊太郎と沈黙の神話」(私という現象)、一九八一・一、冬樹社、一一〇ページ。
- 6 四元康祐「反転された視線——詩集『21』」(谷川俊太郎学 言葉vs沈黙)、二〇一一・一一、思潮社、一七―三二ページ。
- 7 谷川俊太郎「沈黙のまわり」(文章倶楽部)一九五五・九、「愛のパンセ」、一九五七・九、実業堂日本社、「愛について／愛のパンセ」、二〇一九・八、小学館文庫、二二九―二九二ページ。
- 8 「六十二のソネット」(九五・三・二二、東京創元社)、「愛について」(九五・五・一〇、東京創元社)、「シャガールと木の葉」(〇〇五・五・五、集英社)、「ミニモ」(二〇二一・三・六、朝日新聞出版)、「虚空へ」(二〇二一・九、新潮社)。